

観自在

弘長寺寺報
第三十六号
平成三十年
一月(年二
回発行)

(限りなく近い) 未来予想図

弘長寺住職 森田裕光

宇宙科学の第一人者「知の巨人」と呼ばれる ホーキング博士が、2014年に発刊された別冊宝島「地球46億年目の新発見」では、人類滅亡10のシナリオを予測されていた。

その中の第四位が局部的核戦争であった。

その時の地球滅亡の予言残り年数が200年だったが、(それ以前は残り1,000年と予言) 現在は一気に残り100年に縮まっている。(100年ということは、深刻な推移によつては大げさではなく、明日かもしれない)

恐らく局部的核戦争が第一位に躍り出てきたのだと思う。

他国への配慮など毛頭ない、一国の権力を握り、常軌を逸したトップ同士が、机上の核ボタンの自慢合戦です。

軍の幹部を粛正し続け、親族までも殺害する独裁者と、自国第一主義を唱え、他人の意見など聞く耳持たず、政権中枢の協力者を次々と更迭する裸の王様との戦いは、核弾頭の数などもはや問題ではなくなりません。(アメリカ 4,650個、北朝鮮 10個以下) 1発ボタンを押せば終わりです。

正月だからめでたいなどと言っておれぬ不測の突発事態を招く状況が、残念ながら今すぐそこにあります。



平成29年度弘長寺護持会研修旅行大本山天龍寺拜登 H29. 11. 16

魂の因果律を生きる

弘長寺護持会

会長 武田民三

弘長寺 護持会の皆様、ご健勝にて新しい歳をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平成三十年をもつて、平成の時代は終わりを迎えようとしています。

昭和初期に生を受けた人々（私もその一人であります）は、今や八十歳から九十歳にならんとしています。永い間には、数え切れないうほど多くの人々に巡り逢っているのですが、この人生でどんな人と巡り逢えたかによって、その人の人生は大きく変わると言われ、それは運命とも言えるのではないのでしょうか。

「人は皆それぞれの人格にあつた家庭に生まれてくる」

と、ある宗教家の言葉にあります。

それは、父となり母となる人は、生まれ出る子供にとつて最もふさわしい父であり母であると。

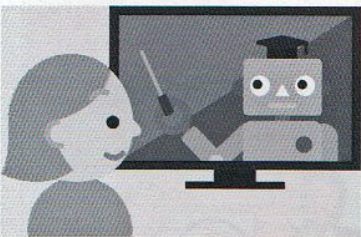
何故なら、この世には「法則」があつて、（これを親和の法則とか「因果の法則」とも言う）類は類を以て集まる法則とでも言うかも知れないですが、人が地上に生を受けるとき、子供の魂は父母の魂と似たような、あるいはお互いの業が似ているとか、遺伝子が類似のものが生まれてくる、と言うのです。

さて昨年の護持会の研修旅行は、京都の臨濟宗大本山天龍寺に拝登いたしました。が、天龍寺の管長様（管長猥下）は、我が弘長寺の方丈様と従兄弟の間柄にあられるお方で、お母上同士がご姉妹でいらつしやるのですね。

このようなご尊縁に巡り逢うことを許され、特別な待遇にて、管長猥下直々に相見を賜り御垂示をいただくことが叶いました。旅行団一行の皆様はもとより、これは弘長寺檀家、護持会の誇りであり、喜びであります。

私たち弘長寺護持会は誇りを自覚し、いよいよ菩提寺を護り続けてまいりましょう。

ところで、最近の「AI革命」をご存知と思えますが、AI（人工知能）が人類を超えるとき、とまで言われています。



しかし、AIでも、量子ピューターでも、原子化学にしても、本来人間が開発したもので

すが、今や人間が、これらにコントロールされる時代とまで言われています。

AIの開発により「仕事の概念や定義が変わる」とか「生活費のために働く必要がなくなり、働き方が変わる」と言われています。

進化するAIを使った先端技術は、電気自動車（EV）の業界をはじめ、コミュニケーション能力のあるロボットが食材の名前を挙げて、調理法を教え、てくれる食品業界とか、体育関連の卓球コーチロボットが玉の飛んでくる方向を予測、ラケットを操って打ち返す等々。

一方、「NIT物性科学基礎研究所」などでは、今までのコンピュータが簡単に解くことの難しい計算式を、一瞬で解く超高性能の新型量子コンピュータを公開し、交通網や無線通

信など、さまざまなネットワークの効率化を進めようとしています。

しかしこれらのことは決して驚いてばかりではないと思います。

人間の本性には、それを生み出し、制御し、活用する力(能力)があればこそのことですよ。

作家の五木寛之さんは、「百寺巡礼」(テレビ番組)

の中で、「お寺は多くの人々が有縁無縁を問わないで多数が訪れることが大切」と言っています。

お寺とは、そのような存在でなければならぬのです。

私たちの菩提寺弘長寺は、文化財指定の阿弥陀さま安置の位牌堂や、立派に整えられた本堂等々の伽藍を誇りとしつつ、檀家護持会のみなさまはもとより、さらなる多くの人々が訪れるお寺でなくてはならないと思っています。



私たちが、前世からこの世に誕生し、誰もが逝くことになる浄土の世界、そこで「魂」としての自分に立ち還って自らが抱いてきた夢や願いを見つめ、「魂」として人生を振り返り、今一度、原点に立ち戻るとき、新たなものが甦るのではないでしようか。

「人は、すべて承知のうえで、自らが望んでこの世界に生まれて来ているのだ。」と教えられます。

この世界でしか味わうことのできない体験を感謝して受け容れ、そして祈りましょう。

祈りは、懇願する祈りもあります、本来の祈りとは、文字通り「宣べること」

であると承知しています。自分の願いや念いを宣言することが祈りであると思っています。

方丈から望む回遊式庭園は美しく荘厳で心に残りました。

檀家の総力で、ますます菩提寺の隆昌を願い、明るい心で祈念してまいろうではありませんか。

皆さんは僧侶で作家の玄侑宗久さんをご存知でしょうか。福島県の仏教の寺に生まれ、大学卒業後もさまざまな仕事を体験し、それをもとに小説を書き始めた。

両刀遣い

弘長寺護持会副会長

内田 松寿

あけましておめでとうございませう。

昨秋は、弘長寺護持会の天龍寺拝登と赤穂観光の旅に参加しました。

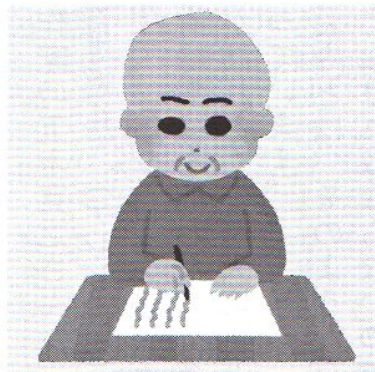
赤穂浪士四十七士の像に思いを馳せ、天龍寺では法堂天井の雲龍画に驚嘆、大

二十七歳で天龍寺専門道場に入門し、三年目の終わりに故郷の寺に戻った。寺を人々の心の拠り所として魅力的な場所にしようとして、開かれたお寺をめざし座禅会や研修旅行は勿論のこと、本堂での各種のコンサートや落語会などのイベントを積極的に展開している。



社会の常識に捕らえられて、小説と仏教の二兎は追えない、二足のわらじなど履けるわけがないと、頭から思い込んでいた。

ある日信頼していた星清先生から、いとも簡単に「両方やれば」といわれ、あなるほど、と思ったとのこと。



作家としては『中陰の花』(平成十三年)で芥川賞を受賞。

『禅的生活』『禅のいろは』など多数。最近の著書では『ないがままで生きる』。この本では「無分別」「無情」「無我」「無心」という仏教の智慧、また「無限」では、秩序や必然が、いかに人間の自由に関わるのか

を考察しています。いずれも人間そのものの、最も平和な在り方についての話です。

両刀遣いといえ、北海道日本ハムから米大リーグ移籍の入札制度によって、エンゼルスに入団した大谷翔平選手に注目しています。評論家の多くは投打の二刀流は成功しないと書いていたのですが、栗山英樹監督のもと、立派に両立させ結果を残しています。日本球界で見られなくなるのは寂しいですが、新天地で大いに活躍してほしいものです。

どうか今年是世界中が平和で明るいニュースが多く聞けますよう。

お寺のご隆昌とお檀家皆さまのお幸せをお祈りいたします。合掌

新年の挨拶

弘長寺護持会副会長

内田磯広

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平素より護持会の行事・事業にご協力くださいます。

感謝申し上げます。

さて今年は戌年です。

干支にまつわる相場格言では「戌笑う」だそうです。

一月四日の市場では株価は跳ね上がり、「戌笑う」の格言通りだ！景気回復は続いている！と、テレビラジオから聞こえてきまし



た。

しかしそのような実感のない者にとつては、全く違う場所にいる異次元の「戌」を見せ付けられているようでした。

昔話の桃太郎では鬼門の方向「丑寅」から出てくる鬼を退治に、反対方向の「申」から始まる「酉戌」が登場してきます。

牛の角をもち、トラのパンツをはいた鬼を、猿鳥犬がやつつけます。

こちらも少々得体の知れない犬ですが、異次元の犬よりも身近に感じます。

年明け数日は程よい気持ちのよい天気が続いていましたのに、原稿書いている十日過ぎ、気温は低く大雪大風です。

事故がないことを願っています。

平成三十年が皆様にとりまして素晴らしい年になりますように念じております。

合掌

あきらめが肝心？

副住職 森田大裕

「諦める」という言葉に関しては物事を放棄する、無気力等のマイナスのイメージがあるのかと思います。しかし、「諦」という字にはもともと「明らか・明らかにする」「心理・悟り」などという意味があること、御存じでしょうか。

「諦念」という仏教用語が元となつて、次第に変化していったものであるというのが定説の様であります。

元の意味合いはともかく、一般的な印象の「諦める」事が悪いイメージなのは何故でしょうか。

それはやはり「物事を中断する」「やる前から無理だと決めつけてやめてしまう」といった「やる気」が無い様に思えるからではないでしょうか。

何事にも立ち向かわなければならぬ、根性を持つてすればなんでも出来る、というような気概が恐らく誰しにも根付いているかと思いません。そしてこれは、社会的にも「常識」であり、

「正常」であると感じている筈です。

しかしこの「常識」が現代人を苦しめているのではないのでしょうか。



この世は思い通りにならない苦しみや不条理で溢れています。それにすべて体当たりで向かっていったのでは身も心もすぐにごぼるごぼるになってしまうでしょう。

勿論、全ての人がむしやらに立ち向かう訳ではないでしょうが、中には「やらなければ」「成し遂げなければ」と思う方も居るでしょう。

その前に、一旦それを受け入れる事を試してみても如何でしょうか。

うか。

期待通りにならなくてもこれで良いのだと思う事で、少しだけ心がやらかくなります。

そうしてから問題に臨むことで改めて冷静に諦めることが出来るのではないのでしょうか。

常識や通念によって諦められない事で自分を壊し、諦めてはいけないという思いで袋小路に迷い込むよりは、今に満足して生きる方が私は健全ではないかと感じます。

何もせず諦めるのも、身動きが出来なくなる程に諦めないのも自分自身には毒でしかありません。自分の心を見つめる一つの選択肢になると幸いで御座います。 合掌

お知らせ

お願い

●お盆の棚経は全檀家を廻ることができました

●お盆の棚経は全檀家終了しましたので、今年も弘長寺地区から始めます。

いつものように十三日から二十日まで、葬儀が入ったら葬儀優先です。

●葬儀用袈裟を御喜捨いただきました

●本金昇り龍袈裟一領を御喜捨いただきました。

●住職が一目見て欲しいと思えた袈裟です。

●施主は小松地区 大国屋 伊藤隆庸殿です。

●御母堂様と妹様（同年に亡くなられました）菩提の為。

●施食会アトラクション

●昨年より施食法要後にアトラクションを設けました。

●全国の民謡、歌と踊りと津軽三味線に堪能しました。

●山下一幸 師率いる

●「山一会」

●のプロの芸に酔いしれました。



任職は考える①

住職

この文章はご寺院向けです。
お檀家様は無理に読まれなくとも結構です。

少し字を小さくします。
写真・イラストも入れません。

宗門宗議会会議録を読んでおきますと、
実に多岐にわたり問題が山積しています。
だから議員の方々は大変だと心底同情
いたします。

今、宗門で一番問題になっているのは
大学の問題ですが、私にはまたかという思
いしかありません。

多々良学園を無償に近い額で譲り渡した
宗門ですから、その程度のことではもう驚
きません。

曹洞宗がまず喫緊に解決すべき事案は
修証義の問題です。(大学問題が喫緊なら、
それと平行してとりかかるべきです)
それほど重大だと私は思っています。

大内青巒居士が、修証義編纂に際し、在
家には坐禅は難しすぎるとして意図的に
「坐禅」という言葉を省かれました。
そこがまず道元禅の意を無視した救いよ

うのない瑕疵であり、根本的に一番大きな
問題です。

申し上げるまでもなく道元禅師は、仏道
修行には坐禅が第一であると眼蔵全巻通じ
て説かれております。

そこで大内青巒居士は困ったのでしょ
うね。

「修証義」と経題を設定したまでは良かっ
たが、修行イコール坐禅を説いていないか
ら、「修証は一等なり」：(修行そのまま
が悟り)という正法眼蔵の絶対にして究極
の教えを修証義に取り入れることが出来な
かったのです。

だから修証義「修行と悟りの意味」とい
う経題を設定しても、「坐したそのまま
悟り」という曹洞禅の心髄が、禅宗であり
ながら坐禅が説かれていないという、情け
ない捏造經典に仕上がっているのです。

そもそも大内青巒居士とは何者なのか、
と調べたら幼少時に曹洞宗住職の兄の寺に
小僧として入ったが寺を転々としていつの
間にか還俗された。

原坦山から禅の知識も得られた学者だが、
実は曹洞宗の正式な僧侶ではありませんん
でした。

知識はある程度お持ちだったようですが、
通仏教的な考えが強い方で、明治初期には
本願寺法主の侍講(講義の助手)も勤めて
おられます。

しかしどういふ訳か時の永平寺員首滝谷

琢宗禅師と懇志であり、修証義を編纂した
曹洞扶宗会を作りその代表でありました。

編纂直後、扶宗会の中で対立し、修証義
編纂後に扶宗会を辞し、曹洞宗から離れて
「尊皇奉仏大同団」を結成し活動され、最
晩年は東洋大学学長を務められた。

私は修証義が宗門に与えた功績は無尽絶
大なるものがあると思っております。

難しい眼蔵の仏法を誰にでも解りやすく
との思いが込められています。

だから通仏教的な考えをお持ちでありな
がら多大な貢献をされた大内居士に感謝こ
すすれ、責める気持ちなど全くありません。

時代も時代ですので曹洞教会修証義を検
証され、良しとされた両本山禅師方を今更
責める気もありません。

ただ現在、専門部会を置き修証義の問題
点を抽出した冊子(ガイドブック)まで作
りながら、それに対する具体的即応が皆無
である現在の宗務庁と宗議会は重い責めを
負うべきであると思っております。

なぜならただ冊子を作り上げただけで、
これは大変だとの問題意識を全く持たず、
いまだ宗門の最重要經典として平然と今日
に至らしめているからです。

そりゃあ、私も修証義を全章暗記してこ
法事で使っていますし、今更という思いも
どこか片隅には確かにありますよ。

でもだからといってそのまま見過ごすこ
となど罪過弥天：宗祖に対する重大な背信

行為であり、檀信徒に対する許されざる詐
欺行為にほかなりません。

一般的な言い方でいえば、確信犯という
ことになるでしょう。

大内居士のねつ造を、見て見ぬふりを決
め込んでいるのです。

いや、たいした問題ではないと軽視する
人、学者にも多様な考え方がるので、宗
侶を含め誰もが納得して信仰できる新しい
經典を作りあげることなど不可能に近いと
思っておられる方も案外おられることでは
しょう。

しかしそれで宗侶個人の信仰が本当に全
うされ、檀信徒にたいする法施が全うさ
れるのでしょうか。

私共の信仰の根幹中の根幹が、偽りやま
がい物でいいのでしょうか。

曹洞宗入門のお経だと言う方が結構いま
すが、寝言を言ってはなりません、「坐禅」
の語句なしでどこが入門でしょうか。

たった100年程前に作られたものを、
現在の宗門が作れないわけがありません、
宗門として信仰の誠実性が問われており、
知らんぷりを決め込むことこそ罪を重ねる
ことになりましょう。

經典は語句の差し替えてできるような生
易しいことではありませんから新しく作る
べきです。

どうしても現在の修証義をという方には
そのまま使っていたいて良いではないで
すか。

しかし、その際には問題点もすっかり盛

住職は考える②

り込む解説本も必要でしょう。

東大大学院で学ばれた国際禅センター所長の藤田一照師が、最新刊「退歩のススメ」で坐禅嫌いの禅宗のお坊さんについて書かれています。

特に永平寺の修行僧などは限られた年月の最低限の修行ですから、一年間は我慢して坐禅をするが、寺に帰れば坐禅など見向きもしない人が多いと書かれています。

特に撰心（一週間一日中坐り続ける修行、臨済宗では接心）期間中は足が痛いどころの騒ぎではない、どこが安楽の法門だ、何もかも捨てて下山しようかとの思いにかられる雲水も多数いるはずです。

坐禅嫌いの雲水に、坐禅が好きになるよう本山から依頼されて坐禅指導に上がっているとのこと。

こんなこと暴露してよいのかなと思うのですが、既に本が市販されている以上、隠しようがありません。

そういえば岡山の小倉玄照老師も同じことを著書（禅のかたち）に書いて嘆いておられた。

「ほとんどの宗侶は坐禅などしていない」師は厳しい方であった、数年前にご遷化された時は朝課の最中であつたという、行持綿密なご老師らしいご最後であつた。

高校教諭から永平寺講師となり、眼蔵家で著書も数冊あり、いずれも格調高い真をつく鋭い文章で、感動し憧れたものです。

十数年前であろうか、私は中国管区布教研修会の場で、今の修証義はそのまま残しても良いから、新しい「修証義」を作るべきとの意見発表をした。

その時講師としておられた小倉老師は、「けしからんやつだ、そんな考えを発表してもらっては困る」と言われ、永平寺系有道会の全国大会に意見発表者として私がどんな発表をするのかを、宗務庁まで見届けにこられた。

私はすんでのところであつたかかったはずだが、時の伊藤宗義老師のおかげで発表ができたと思っている。

恐らく小倉老師は修証義に対して、ご自分も同じ思いを持っていらつしやつたと思えます。

しかしそれを公にすると、宗門が大混乱に陥るとの危惧を抱かれ、その方が怖いと思われていたのではないのでしょうか。

（確かに宗憲の四大綱領から手直しせねばならなくなります）

小倉老師が故人となられた今となっては懐かしい思い出です。

さて、正直に申します。曹洞禅は難解すぎます、眼蔵でどう説明されようが難解です。

あの才僧、南直哉師ですら「非思量」がわからんと仰る、「非思量」と「不思議」の違いもわからん、いくら古い問答で示されてもわからん。（賭ける仏教）

坐禅に目的を求めてはならない、だから何も達成感がない、何も求めてはならぬということは、ある意味で無茶です。

難しいのは当前です、一個半個しか接待できないほどの断絶の危険性を秘めた（如浄禅師）難解な宗派なのですから。

私がいま坐禅にたいして一番納得できないポイントは、何故坐することが即悟りであり仏であるかということの、自身に直接響き感じ得る「確たる実証と確たる自覚が起きない」から、自身の坐

に疑いや迷いを持ち始めることです。

その上に、端的に言えば、苦痛だけがよく、坐禅を好きになれる要素が殆ど見つからないということ

ことです。修行に好きも嫌いもあるか、と言われれば確かにそこまですが。

禅の古老は、「坐ればわかる」とか「坐が足りん」ですませていたのでしょうか。

立場上わかつたようなふりをしていたのかもしれない、道元様の如く文字で言い

切る姿勢が本来であるはずなのに。道元禪師の時代の雲水は、言われるまま坐ればよかつたのです。

生活や将来を気にすることもなく、ただ坐禅修行していればよかつたのです。身心脱落も容易だつたはずです。

何もかも捨てて修行の道を選んだのです。現在の私共に、はたして身心脱落の坐禅が可能でしょうか。

恐らく道元禪師から「家族や名譽やかかえきれぬほどの荷物をぶら下げたまま坐し、如何にして身心脱落の境を得るに堪えんや」と激しい叱責を受けるのが関の山でしょう。

ある会議の席で、県庁所在地の中心となる松江市街の寺院で、毎月坐禅会を開催している寺院はどこでしょうと質問したら、

13ヶ寺中たつた1ヶ寺だけであつた、ご詠歌はするが坐禅はしない、（私もほぼ同類です）何をか言わんやです、要は曹洞禅が自分にも、他人を指導するにも、つとに難解だということ

です。曹洞禅に縁をいただき、敷衍する立場にある私も宗侶は、さて今後どう善処展開すべきであろうか。

今年は満七十才を迎えます。体調不良の箇所も出て参りましたが、でも「言わずには死ねない」との思いで、今年も書きました。

遠慮なしでずけずけ言う宗侶も、この宗門には必要でしょう。

天の加護、命あらば次号にて！

大本山天龍寺拝登

護持会研修旅行 住職

29年度は京都嵐山・大本山天龍寺様への拝登でした。

管長猊下は住職の従兄弟です。

特別待遇をしていただきました。写真のとおり、庫裏の玄関も観光客が長蛇の列です。

書院の縁側を一般観光客が大勢通る声が聞こえるその書院の中で、天龍寺の管長禪師様と相見・お話(御垂示)

を伺い、一緒に記念撮影する時間は貴重で、本当の特別待遇を感じました。

前日は忠臣蔵で有名な赤穂市を市のガイド付きで観光。

夜は開創2年目の新しい温泉ホテル、神戸港温泉「蓮」に宿を取りました。客室から見る光のイルミネーションに輝く神戸港の夜景は見事でした。

特に屋上露天風呂から眺める絶景が昼の疲れを完璧に癒やしてくれました。

そして、ディナーは和洋中華のビュッフェで、神戸牛・ズワイガニ・天ぷら・にぎり寿司等の食べ放題、後で別請求が来ないのかと心配される参加者もいました。

